

一ケナシトマム(木原の湿地)ー

前回は、石狩川左岸のウエンピウカ(wen-piuka)悪い・小石川原の伝承を紹介した。時代・伝承者によつて、伝承内容が変わる代表的な例として紹介した。

前回は右のウエンピウカの位置を、松浦武四郎自筆の「川々取調図」で図示した。その地図のウエンピウカのすぐ上流に描かれていたのが、今回紹介する、「ケナシトマム」である。

安政四年(一八五七年)、松浦武四郎は、幕府に皇上した報文日誌の「再箇石狩

日誌で、「ケナシトマム」について、次のように記述している。

ケナシトマムー(上流に向かい)右の方小川、

此の処にも人家三、四軒

有りしと聞けり。其のア

イヌ等當時一軒もなく、

皆浜にて死に絶えたり。

武四郎は、案内のアイヌの人から、このケナシトマムには、昔、人家が三、四

軒あつたと聞く。しかし、

武四郎が訪ねた時は、アイヌ家屋が、一軒もなく、こ

れは、この地のアイヌの人達が、石狩浜の強制労働で死に絶えたのだと、暗に場所を批判しているのである。

さて、松浦武四郎が、「川々取調図」と、「再箇

石狩日誌」に記録した、「ケナシトマム」は、安政六年(一八五九年)刊行の『東

西蝦夷山川地理取調図

と、文久元年(一八六一年)

刊行の木版本の『石狩日

誌』には、記載されること

はなかつた。

そのためか、明治十三

年に旭川を調査した永田

方正は、翌明治十四年刊

行の『北海道蝦夷語地名

解』に、石狩川(石岸)のア

イヌ語地名として、「ケナシ

トマム(Kenash-tomam)

木原の・湿地】と地名解を

した。

永田方正も、知里真志保

も、松浦武四郎の前記の資

料を見ることなく、石狩川

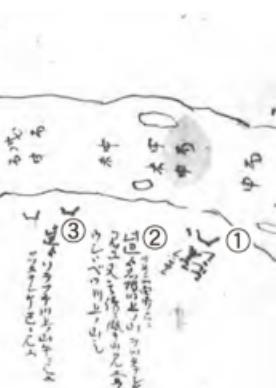
アイヌ語地名として、「石岸」

の「ケナシトマム」を記録

した。

近藤重蔵 「石狩川筋図」

掲載地図



ユトマム(Kenash-tomam)林ノ泥」と地名解をした。

昭和三十五年に、知里真志保は、「上川郡アイヌ語地名解」で、永田方正と同様に、石狩川(石岸)のアイヌ語地名として、「ケナシ

トマム」前後の記録である。「左岸」の①②③の記事は、次の通りである。

①アサガラ 乙名シル・シ

②此辺より川上ノ正面少右ニ石狩川上ノ山ヲツタシケ(註)現・旭

岳見ユ又其傍ニ低キ山見ユ是ハウシ、ベツ川

上ノ山也

③此辺よりソラフチ川上ノ山午(註)南ニ見ユヲタシケ(註)南

南東ニ見ユ

前記の永田方正、知里真志保の記録から、「ケナシトマム」は、石狩川右岸のア

イヌ語地名であったことが、明確になった。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します

て、当時の伝承者から聞いて、地名解を

したのであつた。

四郎より

は、松浦武

五十年前

の文化四年(一八〇七年)の近

藤重蔵自筆の「石狩川筋

図」である。近藤重蔵は、天塩川筋から山越えして、

石狩川を丸木舟で下つ

た時の「右岸」の「ケナシ

トマム」前後の記録である。

「左岸」の①②③の記事は、次の通りである。

①アサガラ 乙名シル・シ

②此辺より川上ノ正面少右ニ石狩川上ノ山ヲツタシケ(註)現・旭

岳見ユ又其傍ニ低キ山見ユ是ハウシ、ベツ川

上ノ山也

③此辺よりソラフチ川上ノ山午(註)南ニ見ユヲタシケ(註)南

南東ニ見ユ

前記の永田方正、知里真志

保の記録から、「ケナシトマム」は、石狩川右岸のア

イヌ語地名であったことが、明確になった。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します